筑紫女学園大学リポジトリ

Nerval et Athanase Kircher

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/113

ネルヴァルとアタナシウス・キルヒャー

間　瀬　玲　子

Nerval et Athanase Kircher

Reiko MASE

Ⅰ．序

19世紀フランスの作家ジェラール・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は作品中で17世紀のドイツ出身のイエズス会士　アタナシウス・キルヒャー Athanasius Kircher（フランス語表記は　Athanase Kircher）（1601年または1602年～1680年）の作品について言及した。キルヒャーは東洋医学、地質学、医学など幅広い分野で活躍した。

筆者は以前ネルヴァルがキルヒャーの作品『エジプトのオイディプス』*Œdipus Ægyptiacus*（1652年～1654年）を通して聖書偽典のひとつ『エノク書』の影響を受けたことを論じた。(1) 本論文では以前の論文で言及しなかったキルヒャーの『地下世界』*Mundus subterraneus*（1665年、２巻目扉に1664年と記載されている本もある）からネルヴァルが影響を受けたのかどうかを検証することを目的とする。過去においてネルヴァルの研究者たちはネルヴァルが『オーレリア』*Aurélia*（1855）の地下世界の描写をする際に、キルヒャーの『地下世界』を参考にしたと考えてきた。ネルヴァルが作品中でキルヒャーとその作品『エジプトのオイディプス』を言及したことは確認できたが、『地下世界』についての言及はない。この疑問に答えるために本論文で議論を進めたい。

Ⅱ．ネルヴァルによるキルヒャーに関する記述

ネルヴァルがキルヒャーについて論じた箇所は数多いわけではない。1844年９月15日「アルチスト」誌 *L'Artiste*「ディオラマ、オデオン座」(2)、『赤い悪魔』*Le Diable rouge* 1849年(3)及び『幻視者たち』*Les Illuminés*（1852年）に収録された「ジャック・カゾット」*Jacques Cazotte* においてである。(4) カゾット（1719-1792）は18世紀フランスの作家であり、主たる作品は『恋する悪魔』（邦訳題名『悪魔の恋』）（1772）*Le Diable amoureux* である。生前は作家としてかなり活躍をしたが、断頭台の露と消えた。ネルヴァルはカゾットの『恋する悪魔』（1845年にパリのガニヴェ社 Ganivet から発行された本）の序文としてこの文章を執筆した。(5)

筆者が以前の論文で言及しなかったのは「ジャック・カゾット」中の以下の文章である。

Les livres traitant de la cabale et des sciences occultes inondaient alors les bibliothèques…L'abbé de Villars, dom Pernetty, le marquis d'Argens, popularisaient les mystères de l' *Œdipus Ægyptiacus*… (6)

カバラやオカルト学を取り扱った書物が当時書庫を一杯にしていた。(中略)ヴィラール神父、ドン・ペルネッティや、ダルジャンス侯爵は『エジプトのオイディプス』(略)の秘儀を一般に普及させた。

ネルヴァルはこの文中でカバラやオカルトに関わる人物名や書物名を羅列したにすぎない。彼はキルヒャーや『エジプトのオイディプス』に関する注釈をしているわけではない。上記の引用の数ページ後にネルヴァルは次のように書いている。

…Songez, lui dit l'initié, que le père Kircher, l'abbé de Villars et bien d'autres casuistes ont démontré depuis longtemps la parfaite innocence de ces esprits au point de vue chrétien. (7)

秘儀伝授者は彼(カゾット)に次のように言った「思ってみてください。キルヒャー師、ヴィラール神父、そして他の多くの決疑論者はすでにずっと昔にキリスト教の観点からこれらの精たちの完全な無実を証明した」

ネルヴァルはカゾットの『悪魔の恋』に対する著者カゾットの考え方がキリスト教の教義からみて問題のあるものではないことを書いているだけのことである。

筆者が前の論文で引用した箇所及び上記の引用にはキルヒャー及び『エジプトのオイディプス』に関する記述はあっても、キルヒャーの『地下世界』に関してネルヴァルは全く論じていない。

Ⅲ．キルヒャーに関する先行研究

ここでキルヒャーに関する研究について論じてみよう。今でも最も参照されているのはジョスリン・ゴドウィン Joscelyn Godwin が1979年に刊行した研究書 *Athanasius Kircher, A Renaissance Man and the Quest for Lost Knowledge* である。(8) ゴドウィン氏はイギリス出身の音楽理論専門の研究者であるが、精力的に著作を発表している。また翻訳でも活躍しており、フランチェスコ・コロンナの『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』の現代英語訳が有名である。この英語訳は同書の研究において大きな役割を果たしている。なお本論文執筆時点ではアメリカのコルゲート大学で教鞭をとっている。

上記のゴドウィンの研究書において、本論文で論じている『地下世界』に関しても詳しく説明されている。1986年に出版された邦訳は本文の翻訳のみならず、キルヒャーに関する研究論文や書誌も収録されており、現在でも出版されている。

ゴドウィンは2009年に『アタナシウス・キルヒャーの世界劇場』*Athanasius Kircher's Theatre of the*

World と題する大著を出版した。(9) 彼は著書の中で『エジプトのオイディプス』と『地下世界』の図版を多数収録しながら、両作品の解釈に力点を置いている。本論文においてキルヒャーの『地下世界』とネルヴァルの作品との関係を考察する上でとても役立つ著書である。

またジュニア・トータロ Giunia Totaro が『アタナシウス・キルヒャーの自叙伝』*L'autobiographie d'Athanasius Kircher* と題する研究書を発表した。トータロー氏はイタリア出身の研究者で、イタリア及びフランスで学業を修めた。巻末の詳細かつ正確な書誌が本論文執筆に非常に参考になった。(10)

Ⅳ．キルヒャーの『地下世界』とネルヴァルの文学世界

キルヒャーの『地下世界』の書物を入手することは困難であるが、フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica から部分的にダウンロードできる。本論文執筆時において２巻中１巻しか収録されていないのは残念である。またファイルを画面で見たり、印刷すると全体が黒くなり、『地下世界』の良さが理解できない。フランス国立図書館のアドレスは以下のとおりである。

http://www.bnf.fr

また Gallica からストラスブール大学（フランス）のサイトに移動することにより、『地下世界』の１巻と２巻を画面上で閲覧することが可能である。Diaporama（スライドショー）の機能を用いて画面上で『地下世界』を読むこともできる。ストラスブール大学のサイトのほうが Gallica よりも明瞭に印刷できる。１巻と２巻を合わせると922ページになる。全文をダウンロードすることはできないが、該当するページを表示させて、その図版をダウンロードすることは可能である。ダウンロード後に画面を拡大すると、思わぬ発見がある。

キルヒャーの『地下世界』はラテン語で書かれている。ネルヴァルはラテン語で書かれた著作物を読めなかったというわけではないが、作品中でラテン語を駆使したというわけでもない。もしネルヴァルが『地下世界』を参照したと仮定するならば、本文ではなく図版を詳細に見たと考えるほうが自然である。

それではいくつかのテーマに分けて、キルヒャーの『地下世界』とネルヴァルの文学世界における描写を比較検討してみよう。その際ネルヴァルの研究書及びゴドウィンの大著を手掛かりとしたい。また過去に発行されたネルヴァル全集の注も参考にする。

(1) 地球の内奥

ネルヴァルの『オーレリア』*Aurélia* 第一部第４章に地下の奥に落ちていく場面が描かれている。その最も重要な箇所を引用してみよう。

…je crus tomber dans un abîme qui traversait le globe. Je me sentais emporté sans souffrance par un courant de métal fondu, et mille fleuves pareils, dont les teintes indiquaient les différences chimiques, sillonnaient le sein de la terre comme les vaisseaux et les veines qui serpentent parmi les lobes du cerveau. ⑾

私は地球を貫く深淵に落ちたと思った。溶解した金属の流れによって苦痛もなく運ばれていくような気がした。無数の似たような河は、その色調が化学的相違を示していて、脳葉の間を蛇行する脈管と血管のように地球の内奥に筋をつけていた。

旧プレイヤッド版の編者のひとりであるジャン・リシェ Jean Richer は『オーレリア』の注釈版（1965年）にリシェ（JR）とマリア・ルイザ・ベレッリ Maria Luisa Bellelli（MLB）の注をのせている。多少長くなるが引用してみよう。

MLB―Voir, dans la *Jérusalem délivrée* du Tasse la description du «sein de la terre», où «un ruisseau roule du soufre et du vif argent» (Trad. Par Philipon de la Madeleine, 1841, Chant XIV, pp.345-6).

JR―Ici, Nerval semble s'inspirer des illustrations du *Mundus subterraneus* du père Athanase Kircher. A propos du royaume souterrain, Daumal évoquait les légendes concernant l'Agartha, relatées par Saint-Yves d'Alveydre dans *La Mission de l'Inde*, par Ossendowsky dans *Bêtes, hommes et dieux*, par R.Guénon dans *Le Roi du monde*. ⑿

MLB―タッソの『解放されたエルサレム』の「地球内部」、そこではひとつの流れが硫黄と水銀を押し流す（フィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳、1841年、14歌、345－６ページ）。

JR―ここでネルヴァルはアタナシウス・キルヒャー師の『地下世界』の図版から想を得たように思われる。地下王国についてドーマルはアガルタに関する伝説を想起させた。それらはサン＝ティーヴ・ダルヴェードルの『インドの使命』、オッセンドウスキの『獣、人、神々』、R・ゲノンの『世界の王』において述べられている。⒀

リシェは『オーレリア』のこの箇所がキルヒャーの影響だけを受けたとは書いていない。数多くの文献のひとつとしてキルヒャーの『地下世界』を挙げている。リシェは1930年に発表されたシュールレアリスムの作家ルネ・ドーマル René Daumal の小文«Nerval le nyctalope»（昼盲者　ネルヴァル）の影響を強く受けており、それが『オーレリア』注釈版に色濃く反映しており、アガルタ（地球の中心にあると言われる伝説上の都市）に関する書籍を列挙した。⒁

リシェが文学者ドーマルの想像力の産物をネルヴァル研究に反映させたことには疑問を感じざるを得ない。またベレッリの説ではあるが、上記の引用のように16世紀イタリアの詩人タッソの『解放されたエルサレム』第14歌が『オーレリア』に与えた影響を指摘している。注⒀に列挙したフランス語訳と邦訳を参考にして、多少考察を試みた。ネルヴァルは『オーレリア』以外の作品におい

てタッソや『解放されたエルサレム』を言及しているので、その影響関係は明白である。ここで問題となっている『解放されたエルサレム』第14歌には地球の内奥や内奥までの流れの描写がある。しかし現時点ではネルヴァルがどの翻訳を参考にしたのかを明らかにできないので、この問題は別の機会に論じたいと考える。

注⑾に列挙した筑摩書房の旧ネルヴァル全集の翻訳者はリシェの『オーレリア』注釈版をかなり忠実に紹介している。しかしドーマルが参考にしたアガルタに関する３冊の本の言及を省略している。⑮

『オーレリア』の翻訳が収録されている講談社世界全集版ではタッソの『解放されたエルサレム』とキルヒャーの『地下世界』の影響を指摘している。翻訳が出版された当時はプレイヤッド版の編者のひとりであるリシェが編集した『オーレリア』注釈版の影響力が大きかったと考えられる。

しかしその後旧プレイヤッド版の校訂上の諸問題が指摘され、新プレイヤッド版が研究の基本文献になってしまうと、リシェの研究はかなり忘れられた存在となってしまった。

以後エゾテリスムの観点からネルヴァルを論じる研究者は少なくなった。本論文で引用に使っている新プレイヤッド版においても、また市販されているポケット版においても『オーレリア』とキルヒャーの『地下世界』に関する記述はどこにもない。

ここで本当にネルヴァルがキルヒャーの『地下世界』から影響を受けたのかどうかを検証してみる必要がある。

『オーレリア』の描写に影響を与えたと思われる『地下世界』において地球の内奥を描いた図版はストラスブール大学版において922ページ中226ページに掲載されている。フランス国立図書館のGallica に収録された電子テキストでは398ページ中225ページである。円形の中に幾つかの毬栗状の球体が描かれており、それらは細い管で結ばれている。所々に A、B、C と書かれている。地上の火山と球体も結ばれている。この図版は非常にユニークであり、球体の形がとてもインパクトがある。また四隅では人面から火を吹いている。水面上には船も描かれている。

『オーレリア』の描写の中で「無数の似たような河」や「脳葉の間を蛇行する脈管と血管」はキルヒャーの『地下世界』の図版との類似性を認めることができると考える。しかしネルヴァルの源泉がこの図版だけであるとは断言できない。キルヒャーの図版を見ると、ネルヴァルの『オーレリア』の描写とは異なる絵柄も指摘できる。

すでに言及したゴドウィンは2009年発行の大著において今問題となっている図版に次のような解説をしている。

> The illustration of the fires within the earth (…) is deservedly one of the most famous in all of Kircher’s works. ⑯

> 地中の火の図版はキルヒャーの作品のすべての中で当然最も有名な図版のひとつである。

ゴドウィンはこのようにこの図版に高い評価を与えている。またオンライン版の『ブリタニカ国

際大百科事典』Encyclopaedia Britannica Online Japan のキルヒャーの項目に掲載されている唯一の図版がこの図版であることもそれを裏付けている。それをもってして19世紀フランスに生きたネルヴァルの時代にもキルヒャーの『地下世界』の地球の内奥を表現した図版が有名であったかどうかを証明することにはならないことは充分承知している。

繰り返しになるがキルヒャーのこの図版とネルヴァルの『オーレリア』の地下世界の描写との間には類似性が認められる。しかしそれがネルヴァルの創作過程の唯一無二の源泉であると断定するまでには至っていない。『オーレリア』注釈版の注のようにタッソの『解放されたエルサレム』の影響も否定しがたいものがある。

⑵ ヴェスヴィオス山とエトナ山

以前の論文でネルヴァルが1849年に発表した『赤い悪魔』という作品の中で聖書の偽典『エノク書』を言及していることを指摘した。そしてネルヴァルがキルヒャーの『エジプトのオイディプス』を通して『エノク書』の知識を得たと結論付けた。⑰ネルヴァルのプレイヤッド版には図版が収録されていないので、フランス国立図書館に初出記事の複写を依頼した。現時点でも Gallica 等には電子テキストは収録されていない。『赤い悪魔』の初出記事とプレイヤッド版を比較すると、表記上の細かな違いしかない。

ネルヴァルは『赤い悪魔』のⅠ章でキルヒャーの『エジプトのオイディプス』を言及している。そして同作品のⅡ章において次のような描写が続いている。ダンテの『神曲』の「地獄篇」第34歌によるとルーキフェルの体が完全に地球を貫いている。ネルヴァルはダンテに導かれて次のような描写をしている。

> Il (Dante) prétend que son corps traverse entièrement le globe, de telle sorte que sa tête se trouve immédiatement au-dessous du royaume des Deux-Siciles et que ses pieds forment deux îles dans la mer de l’ Océanie, aux antipodes de notre Europe. L’une de ses cornes correspond au Vésuve, l’ autre à l’ Etna. ⑱

> 彼（ダンテ）は彼（ルーキフェル）の体が完全に地球を貫き、その結果彼の頭は直接に両シチリア王国の下にあり、彼の足は私たちのヨーロッパの反対側のオセアニア海の二つの島を形作っていると主張している。その角のひとつはヴェスヴィオス山、他方はエトナ山に相当している。

引用文中のヴェスヴィオス山はイタリアのカンパニア州にある火山である。ナポリ湾岸にある。エトナ山はイタリア南部シチリア島にある火山である。ネルヴァルは上記の文章のすぐあとで『神曲』「地獄篇」の第34歌の「世界を貫いているこのみじめな虫」（Ce ver misérable qui traverse le monde）⑲という重要な表現も引用している。ネルヴァルは『神曲』に準拠して『赤い悪魔』を執筆しているが、『神曲』「地獄篇」第34歌ではヴェスヴィオス山とエトナ山は描かれてはいない。なお『赤い悪魔』の初出記事においてネルヴァルがキルヒャーの『エジプトのオイディプス』を記載した箇所

と「ヴェスヴィオス山とエトナ山」を記載した箇所は同じページである。ネルヴァルはキルヒャーの『地下世界』を言及しなかったが、同作品から影響を受けた可能性があると結論づけるのは早計であろうか？

キルヒャーの『地下世界』においてヴェスヴィオス山の図版は Gallica の電子テキストでは398ページ中35ページに収録されており、ストラスブール大学版では922ページ中47ページに収録されている。山の断面から三本の煙が天に昇っている。山の岩肌は比較的ごつごつしている。岩肌には多少の生物が生息している。山の麓には小さな木々が比較的整然と並んでいる。ゴドウィンはこの図版に対して次のような記述している。

> Mount Vesuvius in eruption. In researching Vesuvius, the intrepid Kircher made one of the earliest descents into the crater, leaving a vivid description of what he saw. ⑳

> 噴火しているヴェスヴィオス山。ヴェスヴィオス山を調査し、勇気あるキルヒャーは最も早い時期にクレータに降りた人のひとりになり、彼が見たものの強烈な描写を残している。

キルヒャーがヴェスヴィオス山を探索した話はかなり有名であり、イギリスの英文学者で観念史派の中心人物であるマージョリー・ホープ・ニコルソン Marjorie Hope Nicolson は『暗い山と栄光の山』*Mountain Gloom and Mountain Glory* において「1636年にカラブリア大地震を経験したキルヒャーは、地震の原因と火山について知ろうと、研究と旅に数年を費やした。彼は活動中のエトナ山やヴェスヴィオス山を観察し、その噴火口に降りたのであった」と書いている。㉑ ニコルソンがキルヒャーの『地下世界』に関して行った考察は大著の中でごく一部であるが、非常に示唆に富む。

ネルヴァルが作品内でヴェスヴィオス山について書いたのは数箇所あるが、その中でもイタリアを舞台にした『火の娘たち』に収録された『オクタヴィ』の次の一節が一番印象的である。

> …je me reposais délicieusement sous les treilles des villas, et je contemplais sans terreur le Vésuve couvert encore d’une coupole de fumée. ㉒

> 別荘の葡萄棚の下で心地よい休息をとっていた、そして私は恐れを抱かずに煙のドームに覆われたヴェスヴィオス山をじっと見ていた。

ネルヴァルは実際にナポリを訪問しており、決して空想上の出来事ではない。ネルヴァルのこの一節とキルヒャーの『地下世界』のヴェスヴィオス山の図版を重ね合わせると類似性を認めることができる。火山は当然ながら怖い存在である。しかし図版に描かれた小さな木々が生息しているのを見ると、ネルヴァルはほっとした気分になったに違いない。それが『オクタヴィ』の描写に反映したとしても不思議ではない。

次にキルヒャーの『地下世界』に描かれているエトナ山を見てみよう。Gallica では398ページ中232ページである。ストラスブール大学版では922ページ中233ページである。山の断面から４本の煙が天に向かって登っている。煙だけでなく、何やら固形物のようなものが多数天に向かって登っている。山の上には多数の小さな鳥も飛んでいる。ヴェスヴィオス山と比べると山肌の描写が生々しい。図版の左側にはかなり大きな木が１本生息している。また「著者によって1637年に観察された」とラテン語で書かれている。ゴドウィンはこの図版に対して次のような説明を施している。

Mont Etna in eruption, observed by Kircher from a safe distance. (23)

安全な距離からキルヒャーによって観察された噴火中のエトナ山。

エトナ山の図版のほうがヴェスヴィオス山よりもより詳細な描写だと言える。安全な距離から描いたとは思えないほど真に迫っている。火山の下部から立ち上る噴煙はまるで布地を捻じ曲げたように思える。麓には小さな城砦風の城が建っている。

ネルヴァルはエトナ山に関しても作品内の数箇所で記述している。その中で最も印象深いのは、『東方紀行』*Voyage en Orient*「ラマダンの夜」*Les Nuits du Ramazan* 7 章「地下の世界」*Le Monde souterrain* における次のような描写である。

―Il faut un marteau. Celui de Tubal-Kaïn a ouvert le cratère de l’ Etna pour donner un écroulement aux scories de nos usines. (24)

―ハンマーが必要だ。トバル＝カインのハンマーは我々の仕事場の鉱滓を排出するためにエトナ山のクレータを開けた。

トバル＝カインはプレイヤッド版の注（PL.Ⅱ, p. 1605）によるとすべての鍛冶師の先祖である。ネルヴァルはエトナ山の近くには旅行を行っていない。よってヴェスヴィオス山と違ってエトナ山はあくまで虚構の世界での描写である。

Ⅴ．結論

ネルヴァルは作品中においてアタナシウス・キルヒャーや彼の著書『エジプトのオイディプス』について言及しているが、『地下世界』に関して言及したという証拠はない。しかしネルヴァルが『赤い悪魔』においてキルヒャーの『エジプトのオイディプス』について言及した後でヴェスヴィオス山とエトナ山について言及したのは偶然とは考えられない。

キルヒャーの地球の内奥の図版、ヴェスヴィオス山の図版、エトナ山の図版とネルヴァルの作品の描写との比較を通して言えることは、決定的な証拠はないけれども、その影響関係を認めること

ができるということである。またキルヒャー以上に地球の内奥、ヴェススヴィオス山、エトナ山に関してネルヴァルに影響を与えた人がいないのも事実である。

フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica 及びストラスブール大学のサイトに収録されたキルヒャーの『地下世界』の電子テキストがなければ本論文の研究はなし得なかった。特にストラスブール大学のサイトで公開されている図版は非常に鮮明である。ただし図版をダウンロードして拡大すると、細かい部分が見えにくくなるという大問題が残っている。

今後もネルヴァルが参照したとされる貴重書の電子テキストを入手して研究を続けたいと考えている。そうすることによりネルヴァル研究に新たな視点が生まれると考えている。

注

(1) 間瀬玲子「『エノク書』がネルヴァルに与えた影響」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第４号（2009年１月）、pp. 83-94.

(2) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Christine Bomboir, Jacques Bony, Michel Brix, Jean Céard, Lieven d'Hulst, Jean-Luc Steinmetz et Jean Ziegler et avec le concours de Pierre Enckell et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1989, pp. 840-843. 以下ネルヴァルのこの巻を PL. Ⅰと略す。『ネルヴァル全集　Ⅲ』筑摩書房、1976年に収録された稲生永　訳・註「ディオラマ」と『ネルヴァル全集　Ⅳ　幻視と綺想』筑摩書房、1999年に収録された阪口勝弘訳「ディオラマ、オデオン座」を参考にした。

(3) PL. Ⅰ, pp. 1267-1270. プレイヤッド版には図版が収録されていないのでフランス国立図書館から複写を取り寄せた（*Le Diable rouge, Almanach cabalistique,* Paris, Aubert et C^{ie}, 1850, pp. 7-10）。この複写には1849というスタンプが押されている。実際には1849年に出版されたことを意味すると考えられる。『ネルヴァル全集　Ⅲ』筑摩書房、1976年に収録された入沢康夫　訳・註「赤い悪魔」と『ネルヴァル全集　Ⅱ　歴史への旅』筑摩書房、1997年に収録された田村毅・畑浩一郎　訳「赤い悪魔」を参考にした。

(4) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome Ⅱ, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Jacques Bony, Max Milner et Jean Ziegler et avec le concours de Michel Brix et d' Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll.«Bibliothèque de la Pléiade», 1984, pp. 1075-1118. 以下この巻を PL.Ⅱと略す。ネルヴァル著、入沢康夫訳『幻視者　あるいは社会主義者の先駆者たち（上）』現代思潮社、1968年とジェラール・ド・ネルヴァル著、入沢康夫訳『幻視者　下』現代思潮社、1968年（1989年第三刷）を参考にした。上巻と下巻は出版年が違うので題名の表記に多少の違いがある。また『ネルヴァル全集　Ⅳ　幻視と綺想』筑摩書房、1999年に収録された入沢康夫訳『幻視者　あるいは社会主義者の先駆者たち』を参考にした。

(5) フランス国立図書館（http://www.bnf.fr）の電子テキストサイト Gallica にはカゾットの『恋する悪魔』の1845年版は収録されてはいないが、1871年版が収録されている。フランス国立図書館が所蔵している二つの本の書誌事項(著者名、題名、ネルヴァルの序文、エドゥアール･ド･ボーモン Édouard de Beaumont の挿絵）はほとんど同じである。違うのは出版社、出版年と版型である。

『恋する悪魔』1871年版の電子テキストを Gallica からダウンロードするとネルヴァルの序文は本全体の約三分の一を占めている。200枚のド・ボーモンの挿絵はカゾットの本文のみならず、ネルヴァルの序文も飾っている。彼の挿絵はおどろおどろしいというよりは可愛いと表現するほうが適切である。

ネルヴァルのプレイヤッド版（PL.Ⅱ, pp. 1742-1743）によると、ネルヴァルは1817年に発行された

カゾット全集４巻本の１巻目の序文を参考にして「ジャック・カゾット」を執筆したとされている。

筆者は幸いにもこの全集の１巻を参照することができた。問題となっている序文を読んでみたが、アタナシウス・キルヒャーに関する記述は何もない（*Œuvres badines et morales, historiques et philosophiques de Jacques Cazotte*, première édition complète, ornée de figures, tome premier, Paris, chez Jean-François Bastien, 1817）。

Cazotte, *Le Diable amoureux*, édition de Georges Décote, Paris, Gallimard, coll.«Folio», 1981に記載されているカゾットの年譜を参考にした。また Jacques Cazotte, Le *diable amoureux*, édition critique par Yves Giraud, Paris, Honoré Champion, 2003に記載されている過去の版の変遷を参考にした。ネルヴァルが序文を書いた『悪魔の恋』はその図版が有名であることがわかる。またネルヴァルが第１巻を参考にしたと言われているバスチアン版がカゾット全集の基本文献のひとつであることも書かれている。

ジャック・カゾット、渡辺一夫・平岡昇訳『悪魔の恋』（世界幻想文学大系　第一巻）国書刊行会、昭和51年を参考にした。カゾットに関する文献は非常に少ないので、渡辺一夫氏の「カゾットのこと」や平岡昇氏の「ジャック・カゾットの生涯と作品」は本研究にとって非常に役立った。J・カゾット、渡辺一夫・平岡昇訳『悪魔の恋』（バベルの図書館　19）国書刊行会、1990年にはJ・L・ボルヘスの序文と『悪魔の恋』だけが収録されている。月報に収録された田中義廣「カゾットとマルチニスム」において「1817年版の全集の編者バスチィアンはカゾットの書簡、裁判記録、予言、神秘的幻視の記録、伝承など百三十頁にわたって収録した。ネルヴァルはこれらの資料その他を手際よくまとめて、見事な、あまりにも見事な人物像を創りあげてしまった（...）」という重要な指摘がなされている。澁澤龍彦『変身のロマン』学習研究社、学研Ｍ文庫、2003年に渡辺一夫・平岡昇共訳『悪魔の恋』の一部が収録されている。巻末には澁澤氏による簡にして要を得た説明文が添えられている。

⑹　PL. Ⅱ, pp. 1083-1084.

⑺　PL. Ⅱ, p. 1086.

⑻　Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher, A Renaissance Man and the Quest for Lost Knowledge*, London, Thames and Hudson, 1979.　邦訳はジョスリン・ゴドウィン著、川島昭夫訳、澁澤龍彦、中野美代子、荒俣宏解説『キルヒャーの世界図鑑』工作舎、1986年。

⑼　Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher's Theatre of the World*, London, Thames & Hudson, 2009.フランス語訳は Joscelyn Godwin, traduction Charles Moysan, *Athanasius Kircher, Le Théâtre du monde,* Paris, Imprimerie nationale Éditions, 2009である。

⑽　Giunia Totaro, L'autobiographie d' *Athanasius Kircher*, Bern, Peter Lang, 2009.

⑾　Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome Ⅲ, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Jacques Bony, Michel Brix, Lieven d'Hulst, Vincenette Pichois, Jean-Luc Steinmetz, Jean Ziegler et le concours d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll.«Bibliothèque de la Pléiade»1993, p. 703. 以下ネルヴァルのこの巻を PL.Ⅲと略す。ネルヴァルの『オーレリア』を翻訳する際に『ネルヴァル全集Ⅲ』筑摩書房、1976年に収録された佐藤正彰訳『オーレリア』と詳細な注を参考にした。本文中に紹介したリシェによる『オーレリア』注釈版の注の一部を忠実に紹介しているのでとても役に立つ。『世界文学全集　73　ネルヴァル／ロートレアモン』講談社、1978年に収録された稲生永訳『オーレリア　または夢と人生』と訳者による注もとても参考になった。『ネルヴァル全集　Ⅵ　夢と狂気』筑摩書房、2003年に収録された田村毅訳『オーレリア　あるいは夢と人生』も参考にした。

⑿　Gérard de Nerval, *Aurélia ou le rêve et la vie, lettres d'amour*, édition établie et présentée par Jean Richer avec la collaboration de François Constans, Maria Luisa Belleli, John William Kneller, Jean Senelier, Paris, Minard, 1965, p.19.

⒀　タッソの『エルサレムの解放』には数種類の翻訳が存在する。この作品を考察する際 Le Tasse, *La Jérusalem délivrée,* traductions nouvelles par Auguste Desplages, Plan de la Tour, Editions d'Aujourd'hui, 1976,

p.254を参考にした。(A) この書籍は Paris で Charpentier 社より1858年に出版された本の復刻版である。序文によるとこの翻訳は1840年に初版が出ている。年代的にはネルヴァルがこの翻訳を読んだ可能性はある。ただし図版もないのであまり魅力的な翻訳ではない。

『オーレリア』注釈版においてマリア＝ルイザ・ベレーリが引用した翻訳（フィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳）を入手したが分析には至っていない。代わりにデプラージュ訳を参考にした。フィリポン・ド・ラ・マドレーヌ訳にはセレスタン・ナントゥイユ Célestin Nanteuil の図版が掲載され、ラマルチーヌによるエルサレムの描写も加わっている。ナントゥイユはネルヴァルと親交があったとされている。ネルヴァルがこの翻訳を参考にしたかどうかは今後検証する必要があるが、とても魅力的な翻訳であることは間違いない。(B)

ネルヴァルの『火の娘たち』*Les Filles du Feu* の序文「アレクサンドル・デュマへ」*À Alexandre Dumas* の注においてマリア＝ルイザ・ベレーリの論文（1963）が引用されている（PL. Ⅲ, p. 1193）。そこでベレーリが引用した『解放されたエルサレム』の仏訳はバウール＝ロルミアン Baour-Lormian によって翻訳され、パリのアンブロワーズ・タルデュー社 Ambroise Tardieu から1821年に出版された本である。こちらの仏訳は未見である。(C) Le Tasse, *Jérusalem libérée*, traduction nouvelle de Michel Orcel, Paris, Gallimard, coll.«Folio», 2002に収録された詳細な書誌のフランス語訳の項目には上記の(A)と(B)は記載されているが、(C)は記載されていない。邦訳はタッソ、A. ジュリアーニ編、鷲平京子訳『エルサレム解放』岩波書店、岩波文庫、2010年、361ページを参考にした。アルフレード・ジュリアーニ氏（1924―2007）が『解放されたエルサレム』全体を約三分の一に再編した著作の日本語訳である。翻訳者である鷲平氏は『エルサレム解放』という訳語を用いており、その理由も詳しく述べている。本論文では一般的に使われている『解放されたエルサレム』という訳語を用いた。

⑭ René Daumal, *L'Évidence Absurde, Essais et notes*, Ⅰ (1926-1934), édition établie par Claudio Rugafiori, Paris, Gallimard, 1972, pp. 38-50. この作品は翻訳されていないが、*Le Mont Analogue* は翻訳されている（ドーマル、巖谷國士訳『類推の山』河出書房新社、河出文庫、1996年）。翻訳者の巖谷國士氏が1978年４月に執筆した解説は非常に示唆に富む。ドーマルがネルヴァルを精読し、「あらゆる人間精神に共通するひとつの宇宙」を学んだことが書かれている。またドーマルがサンスクリット語を習得し、インド文学とその象徴的体系の研究を行ったことも書かれている。

⑮ 筑摩書房の旧ネルヴァル全集発行当時は不詳であったサン＝ティーヴ・ダルヴェードル（フランスの作家）、フェルディナンド・オッセンドフスキ（現在のラトビアで生まれ、ポーランドで死亡した作家）、ルネ・ゲノン（フランスの作家）はエゾテリスム研究では有名な人物であることがわかっている。

⑯ Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher's Theatre of the World*, p.131. フランス語訳は Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher, Le Théâtre du monde*, p.131. Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher, A Renaissance Man and the Quest for Lost Knowledge,* pp88-89にも地球の内奥を描いた図版が掲載されている。ゴドウィン氏はこの地球内部を「蜂の巣のように穴だらけにされた」（riddled ）という単語で表現している。

⑰ 間瀬玲子「『エノク書』がネルヴァルに与えた影響」（前掲論文）、pp. 83-94.

⑱ PL. Ⅰ, p. 1268 及び *Le Diable rouge, Almanach cabalistique*, p. 8.

⑲ PL. Ⅰ, p. 1269 及び *Le Diable rouge, Almanach cabalistique*, p. 9. プレイヤッド版の注によるとネルヴァルは Brizeux の翻訳（1841年版）を使っている。1841年版は未見であるが、*Œuvres de Dante Alighieri, La Divine Comédie*, traduction nouvelle par A.Brizeux, *La vie nouvelle* traduite par E.-J. Delécluse, Paris, Charpentier, 1847, p. 302で確認した。

⑳ Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher's Theatre of the World*, p. 132. フランス語訳は Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher, Le Théâtre du monde*, p. 132.

㉑ Marjorie Hope Nicolson, *Mountain Gloom and Mountain Glory,* Seattle and London, University of Washington Press, 1997, p. 168。翻訳をする際に M・H・ニコルソン『暗い山と栄光の山』国書刊行会、クラルテー

ル叢書　13、1989年を参考にした。原書には図版が掲載されていないが、邦訳にはキルヒャーの『地下世界』などの図版が掲載されている。

(22) PL. Ⅲ, p. 610.「オクタヴィ」を訳す際『ネルヴァル全集Ⅱ』筑摩書房、1975年に収録された入沢康夫訳『火の娘たち』、『ネルヴァル全集Ⅴ　土地の精霊』筑摩書房、1997年に収録された中村真一郎・入沢康夫訳『火の娘たち』、ジェラール・ド・ネルヴァル著、中村真一郎・入沢康夫訳『火の娘たち』筑摩書房、ちくま文庫、2003年を参考にした。

(23) Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher's Theatre of the World*, p.131. フランス語訳は Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher, Le Théâtre du monde*, p.131. Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher, A Renaissance Man and the Quest for Lost Knowledge,* pp. 90-91に『地下世界』に掲載されたエトナ山の図版が掲載されている。この図版が書物の１ページと四分の一を占めている。非常に鮮明に印刷されており、エトナ山の図版の研究上これ以上役立つ図版はない。

(24) PL. Ⅱ, p. 731.『東方紀行』を翻訳する際に G・ド・ネルヴァル、篠田知和基訳『東方の旅　―　上』国書刊行会、世界幻想文学大系　第31巻 A、昭和59年と G・ド・ネルヴァル、篠田知和基訳『東方の旅　―　下』国書刊行会、世界幻想文学大系　第31巻 B、昭和59年を参考にした。また『ネルヴァル全集　Ⅲ　東方の幻』筑摩書房、1998年に収録された野崎歓・橋本綱訳『東方紀行』も参考にした。

付記：本論文は平成22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「ネルヴァルにおける視覚芸術と文学作品の関係」（課題番号　21520359）の研究成果の一部を公表したものである。

（ませ　れいこ：英語メディア学科　教授）